



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵  
平成二十九年二月第百十二号

## 春近し

今年も早や二月の後半に差しかかり、梅の便りも届く季節になりました。春の足音が少しづつ近づいているようです。春を待ち望む気持ちは毎年のことですが、それも数年前にくらべてその気持ちが少しづつ強くなっているようにも感じます。歳のせいでしょうか。

今年最初のお便りです。新春にちなんで初めに大きな夢の話から。

### 大きなナスの夢

「元旦に大きなナスの夢を見たよ」

「へー、そいつあれぐらい大きなナスなんだい？三十センチぐらいの大きさか？」

「いや、もつとでかいよ」

「じゃあ、置一じようぐらいの大きさか？」

「いや、もつとでかいよ」

「じゃあ、町内ぐらいの大きさか？」

「いや、もつとでかいよ」

「じれつてえな、いったいどれぐらい大きいナスなんだい？」

「暗闇にヘタをつけたぐらいの大きさだ」

### 僕の夢

死ぬまでに一度でいいからポルトガルへ行ってみたい。それも一週間や十日ではなく、半年ぐらいかけて、あわよくば一年のんびりと。そして一つの街に留まるのではなく、四、五日おきに転々と街から街へとバスや列車で移動する。海沿いにある小さな港町や古都を巡り歩く。そんな旅をしてみたい。むかしインドや中東などを旅したような気まぐれな旅。街で多くの人と出会い、そして街を去るたびに別れがあり、後ろ髪をひかれる思いで街を去っていく、そんな旅。

そんなふうにして最後にたどり着く街はやはりリスボン。そこを最後の街にして、そしてこの国に永遠の別れを告げる。

なぜこんなにもポルトガルへ行ってみたいと思うのだろうか。具体的な理由はわからないけれど学生時代から、会ったこともないポルトガルの人々になんとも言えない懐かしさを感じていた。

大人になって、ある時「フアド」という音楽を聴いて、歌っているのがアマリア・ロドリゲスという女性歌手で、それがポルトガルの民族音楽だと知って、ますます想いはつのつていった。

「フアド」

運命とか宿命という意味らしい。ポルトガル人の魂の歌でもある。海に働きに出て何日も帰ってこない男たちに思いを届けるように歌い上げる。だけど本当はもつと深い意味があつて、歌詞のなかに時折出てくる「サウダーデ」という言葉がフアドの心情をもつとも表現しているのだという。ポルトガルの辞書には「愛する人がそばにいないことで心が痛む思い。その人にそばにいてほしい。また会いたい」とある。だけどそれでも言い表せない深い思いがサウダーデという言葉にはあるという。会いたいけれど、もう二度と会うことのできない、やるせないあきらめの思い。そんな思いもフアドの歌声に秘められている。

旅に疲れて夕方、私はリスボンの下町の、古くからあるこじんまりとしたレストランに身を寄せる。店内は煙草の煙と人生の悲しみに薄汚れた壁。少し乱雑に置かれたテーブルがあつて、客たちが肩を触れ合うようにワインを楽しんでいる。互いに見知らぬ者どうしであつても、すぐに打ち解けて会話が弾む。気だるさと陽気な声が混在する不思議な空間。そしてイワシを焼いた料理の香ばしい香りがあたりに漂う。

夜の十二時近くになって店の給仕がそれぞれのテーブルに置かれた燭台に火をともし部屋の電灯が消される。薄暗くなった店の奥からさりげなくフェアデイスタが現れる。長い黒髪と胸を大きくはだけた黒のドレスをまとい、黒のショールを羽織った女性がなんの合図もなく、ふいにフアドを歌い始める。客たちのお喋りは次第に減り、やがて静まり返り、フアドの歌声だけが店内に響きわたる。

私はこの店の常連客に溶け込み、自分が日本人であることを一瞬忘れ、フアドの歌声に自分の心を重ねていく。そしてほろ酔い気分になって思う「ああ、もうこれでポルトガルにくることは二度とないのだ」

これが僕の夢。叶うことのない夢。



正月三日

さて話を新年に戻して、今年の始まりはとても穏やかに過ごせました。一月とは思えないほどの穏やかな天候だったせいもありますが、元旦から三ヶ日にかけてのんびりと読んだ小説のお陰かもしれません。この文庫本を読んでいる間、その物語に惹きこまれ、とてもゆったりと時間が流れていきました。その小説について少しご紹介いたします。

『阿弥陀堂だより』南木圭士著

やや複雑な過去をもつ主人公の孝夫は売れない小説家。一度は賞を取ったものの、思

い通りの小説が書けずに日々過ごしている。一方、高校時代からの知り合いだった妻の美智子は有能な医師で多忙な毎日を送っている。だから家事はすべて孝夫の仕事になっていた。ようやく妻が妊娠したのだが、子宮内で胎児が死亡し掻破（そうは）の手術が行われた。そのことをきっかけに妻の体調が崩れ、仕事もできなくなり、夫婦そろって東京から夫の実家である信州の片田舎に引っ越すことになる。

のんびりとした田舎での二人の生活が始まり、そこから新たな物語が展開していく。その村の山の中腹には「阿弥陀堂」というトタン葺きの小さなお堂があって、そこには九十六歳になる老婆のおうめさんが一人で住んでいる。ドラム缶の風呂はあるがトイレはない。毎日どうやって用を足しているのだろうか。このおうめさんのことが中心になって話が展開していく。

村役場で働く若い娘、小百合ちゃんがおうめさんに取材し、おうめさんの語る話が村の広報にコラムとして連載されている。そのコラムのタイトルが小説の題名にもなっている「阿弥陀堂だより」。このコラム記事が小説の随所に出てきます。

たとえば

「目先のことばかりにとらわれるなど世間では言われていますが、春になればナス、インゲン、キュウリなど、次から次へと苗を植え、水をやり、そういうふうが目先のことばかり考えていたら知らぬ間に九十六歳になっていました。目先しか見えなかったの、よそ見をして心配を増やさなかったのがよかったのでしょうか。それが長寿のひけつかもしれません。」とか

「九十六歳の人生のなかでは体の悪いときもありました。そんなときはなるようにしかならないと考えていましたので、気を病んだりはしませんでした。なるようになる。なるようにしかならない。そう思っていればなるようになります。気を病むとほんとの病気になるてしまいます。」などなど。

そして信州の自然のゆったりとした風景に溶け込むように、美智子の体調も良くなり、心もだんだんと変化していきます。そして読者の私のこころも、次第にゆったりとした気分になっていきました。



### 親鸞聖人の教え

熟柿庵は、あらためて言うまでもなく浄土真宗の寺院です。そして浄土真宗は親鸞聖人を開祖とする宗派です。

親鸞聖人は、仏教の始まりであるお釈迦様の教えから、直接の師匠である法然上人の教えに到るまで、自らの心と照らし合わせながらずっと学んでこられました。結婚もし、人生に翻弄されながら生きて来られました。そして最後に「弥陀の本願はこの私のためにこそあったのだ」と告白しておられます。

人間の歴史が始まって以来、私たちは自分の生まれてきた本当のわけも知らず、いつ来るともしれない人生の終わりのなかで、思いもかけない人生を生きています。理不尽な経験もたくさんしてきました。そして今も、なぜ生きているのかという本当の意味もわからず日々過ごしています。歳を重ねるごとに、体力の衰えとともに「もう充分に生きたから、もう充分だよ」という思いもふつと湧いてきます。お檀家さんからも時折そういうお声を耳にします。仏教はそうした私たち人間のここから生まれました。

しかし「なぜ生きているのか」とか「生きていることの意味は何か」とか「死ぬとはどういうことか」といった堅苦しい問いかけは仏教にはあまりふさわしくありません。そんな問いかけに対して言葉や理屈で返事できるようであれば、わざわざ苦労して大変な人生を送る必要はありません。

一人ひとり、それぞれの人生を生きていく中で、一人ひとりの答えが「むぎだされてまいります」。

私は縁があつて、身近に親鸞聖人の教えに触れて生きてまいりました。そしてまた、人生の大先輩の方からは、さまざまな身の上話や素朴な思いを聞かせていただきました。それらのことが今の私のこころの拠りどころになっております。

このお便りでは、以前にもまして、いろんな話題を盛り込みながら親鸞聖人の教えをコツコツとお伝えできればと思っております。今年もよろしくお願いいたします。

## 【おしらせ】

☆ 春の彼岸会法要のご案内

三月二十日（月曜日祝日）午前十時から熟柿庵にて彼岸会法要をおこないます。皆様のご参詣をお待ちしております。

☆ 「歎異抄にまなぶ会」のご案内

二月二十五日（土曜日）午後六時半から「歎異抄にまなぶ会」の勉強会を行います。三十分の坐禅のあと、「正信偈」を誦読してその後「歎異抄」をひもといてまいります。勉強会のあとは飲食しながらのフリートークの時間です。会費千円。宗派を問わずご参加をお待ちしております。